曹洞宗中国管区 教化センターだより

《発行所》
曹洞宗中国管区教化センター
〒722 尾道市東土堂町17-29
TEL0848-25-2855
〈印刷所〉
印刷ショップ・イトウ
TEL0849-31-6495

平成四年度 曹洞宗布教方針

わが曹洞宗は、釈迦牟尼仏を本尊とし、高祖承陽大師道元禅師、大祖常済大師瑩山禅師を両祖と仰ぎ、そのみ教えとおさとしに導かれ、平和な社会の実現と悔いのない人生を歩むことを念願としております。

宗門では「修証義」の心を大切に「今二十一世紀へわたしとあなたの思いやり」を合言葉として、人間の尊さの自覚、一人びとりの人権の尊重、生きとし生けるものの生存にかかわる環境への配慮、ともどもに思いやりの心を生かした家庭づくりと平和な社会づくりをめざしています。それは私達仏教徒の使命でもあります。

そのためには、常に、坐に親しみ、坐禅の心を日々の生活の中に実践し、自分の正しい姿にめざめるとともに、祖先を尊び、祖先を通してほとけに出会い、ひたすら仏法僧の三宝に帰依して生きることを日常の指針としたいものであります。

七百有余年の歴史と伝統に輝く宗門が僧侶と檀信徒と共に真に和合団結して、二十一世紀への光明となりますよう精進することを祈念して止みません。

こうした管長告諭に則り今年度の布教方針が、左の如く定められた。

一、仏法僧の三宝に深く帰依し、功徳を積み、仏教徒としての正しい信仰心を育てる。

二、お仏坦に一仏両祖を奉祀する運動を継続し、宗門信仰の一層の高揚に努める。

三、全ての人間の尊厳と平等への自覚を高め、仏教精神に基づく世界平和の実現を希求する。

四、仏祖の教えに反したところを深く反省するとともに、一人びとりの人権を尊重し、差別のない社会の実現をめざす。

五、生きとし生けるものの生存にかかわる自然環境を守り、ものを大切にしよう。

六、正しい坐に親しみ、坐禅の心を日々の生活の中に実践し、幸せな日おくりをする。

七、祖先を尊び、祖先を通して「ほとけに出会う」　信をおこし、慈愛の心に徹する。

八、合掌礼拝運動を通じて、ともどもに思いやりのこころをささげ合い、明るい家庭づくり社会づくりにつくす。

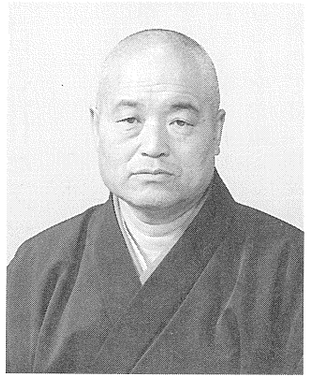
こうした布教方針の具体的推進についての、教化メーンテーマを、「ほとけに出会う」とし、教区、宗務所、管区、寺院等々、どこへ行っても同じポスターが貼ってあり、統一した主題によって布教がなされ、宗門のあらゆる機関が一つのテーマによって活動を展開するよう努める。

目　次

●ほとけさまに出会う……6・7
●親子ゼンインサマーセミナー……8・9
●集中伝導……10・11
●誌上法話「春に想ふ」……12
●人権学習について……13
●禅をきく会……15

まーとーく

思いやりの心



山口県
教化主事
青木源裕

二十一世紀も現在の状態が続くなら人口は六十億をこえ、資源は枯渇に向かい、地球は一層汚染され、崩壊しやすい状態になると予測されております。

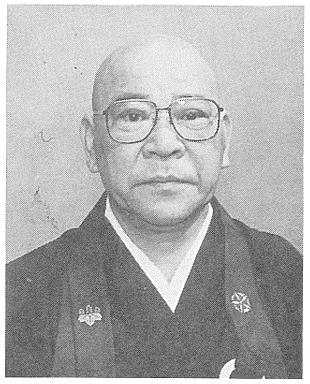
こうした多くの危機感をもって迎えられようとしている二十一世紀、この暗い未来を防ぐため、私共佛教徒は今何を成すべきか、この問いかけに一つでも応えようとして努力しているのであります。

曹洞宗の教典修証義は生死の苦悩を解脱する道すじを説き、多くの人や自然によって生かされている自己に目覚め、感謝して生きることを教える、この修証義こそ二十一世紀の危機を救ってくれる、聖典であると信じます。

人間が生まれながらにもっている美しい心をとりもどすため、今ここに教化活動の原点に立ち帰り、修証義の教えに基づき現実をきびしくとらえ「思いやりの心を」もとに力強く誓い合うことに、意義があると考えます。

我々は常によいことをしようとこだわりがちですが、修証義の教えにもあるよう、こだわらずに自然と善行ができなくてはいけないのです。お互いに執着せずに、自然と善行が行えるように共に精一杯精進しましょう。

会島雄二先生の講演を聞いて



岡山県
教化主事
矢木亮司

もう二十年近くも昔のことですが、その頃、京都大学の教授をなさっておられた会島雄二先生の講演をお聞きする機会がありました。演題は、とっくに失念しましたが、講演の中で、夫婦のそれぞれの年代のあり方について、今もはっきりと記憶に残っている興味深いお話がありました。あちこちでお話をなさっておられるので、すでに御承知の方も大勢おられると思いますが、簡単に御紹介してみたいと思います。

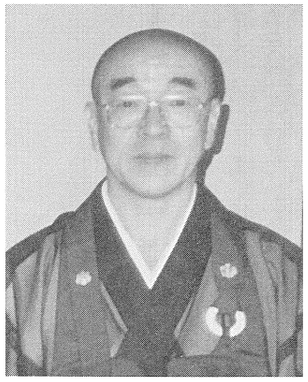
まず、二十代の夫婦に必要なものはお互いの「愛情」だけです。愛情さえあれば、貧しくても、苦しくても、二人の間はいつも円満です。しかし、三十代になってくると、お互いが「努力」しないと、夫婦関係がうまく運ばなくなります。それはそうなるだけのいろいろな要素があるわけですが、紙面の都合で、各年代のそれぞれの要素は全て省かせて戴くとして、四十代になると努力だけではだめで、お互いに自分が「我慢」する年代に入ってきます。更に五十代では「諦め」の年代になります。諦めの年代を何とか通りこして六十代になると、今度は一転して「労り」の年代にかわってくるそうです。更に七十代になると、お互いに「感謝」し合う年代になると会島先生は言っておられます。

最近は、日本も欧米なみに離婚率が年々増加の傾向にあるそうです。それも三十代、四十代が圧倒的に多く、中には五十代でも離婚してしまう夫婦が多くいるようです。努力し、我慢し、諦めなければいけないその時機に、努力が足りない、我慢ができない、諦めきれない人達が増えてきたのではないでしょうか。最近の子供は我慢ができない、すぐに不満を口にすると言われますが、物質的に恵まれすぎた現代では、大人もそうなってしまっているのではないだろうかと思います。その先に、労りや感謝という、ほんとうに夫婦の味わいの出る年代が待っているというのに、何とも悲しい時代になってしまったなあという気がします。

会島先生は、八十代、九十代の夫婦については述べておられませんが、自分なりの浅はかな考えで、八十代は「拝み合い」、九十代はお互いに全てを覚り切った「佛陀」の年代とでも考えればいいのかなあと思っています。

今年は、珍らしく、二月三月で五組の結婚披露宴への招待を受けました。その中の一つ、大阪の中之島ロイヤルホテルで、かつての教え子がほんとうに美しい花嫁になっての披露宴がありました。自分の教え子という気安さもあって、スピーチの途中でふいに会島先生の話を思い出し、おこがましくも、八十代、九十代までつけ加えて少し長めのスピーチになり、我ながら心苦しく思いました。しかし何日かして、花嫁の母親から丁重な書状が届き、その中で、自分たち夫婦も今、諦めの年代ですが、諦めずに佛陀の年代まで頑張りたいと思いますと書かれてあったのを見て、一寸気の安まる思いがしました。そして、ひょっとすると、これも教化の一端かなあ、と考えたりもしています。

頭を剃れども欲を剃らず



広島県
教化主事
垣井龍雄

教化宗団としての役割の一つは、個人の救済であり、更には社会問題への提言でなくてはならないと思う。

社会問題への宗教の役割について、評論家の加藤周一氏はのべている。

今世紀の後半に大量のエネルギーを消費する高度工業化社会が、地球的規模で生みだした問題は大別して三つある。第一は核の廃止ではなく核の拡散問題。第二はオゾン層、森林破壊などの環境問題。第三は生活程度の格差の拡大により政治的緊張が増大している南北問題である。

この問題は、技術的な対策だけでは解決されず、十分な技術に加えて、世界の有力な国の価値体系が根本的に変わることが必要であり、その意味において、世界的宗教である仏教、キリスト教の役割が重大である。特に仏教の「利他行」による自己中心主義からの根

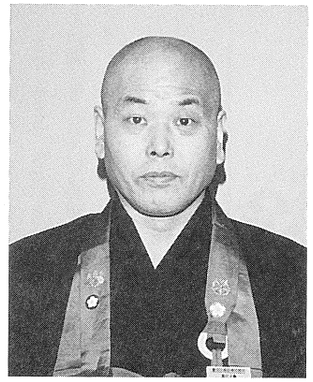
本的価値転換こそこれを救う道である。と

近代化の潮流は自利の重視といってもよい中で、菩薩行の実現は難事ではあるが、将来の人間社会生存の為にはこれ以外に今日的有効な対策はないと思うし、仏教の役割を痛感する事である。

利他行は「自未得度先度他」と教えられ、船が遭難しボートで避難する時、残った二人の乗客のうち、二人乗れば沈む、一人だけなら何とか逃れることが出来るという時、自分は沈む船に残って他の一人をボートに乗せることが出来ることでなければならない。

この自覚が出来ていなくて、利他行のすすめが出来るのかと省み、「頭を剃れども欲を剃らず、衣を染めて心を染めず」の無住禅師の教えに自己を省みる日々である。

教化者として人権学習と自己改革を



鳥取県
教化主事
鎌谷良憲

ある老師から「最近の若い人は、自分の解らぬことでも、解ったふりをして聞こうともしないし、間違いを指摘しても、その場さえ切り抜ければ、あとは、それについて深く考えることも、していないのではないか」という言葉を聞いた。

私にとって、これは痛言であった。

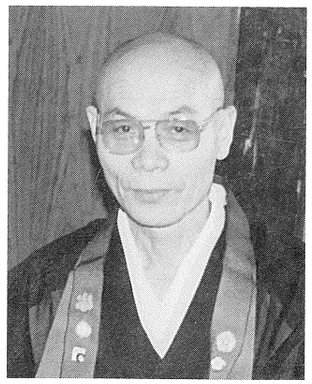
何故なら、師匠健在の時期は、寺以外の事業に勤務していて、職場では、地位の上下関係のみが優先するから、知らぬ事でも出来るだけ解ったふりをし、さらに、自分では精一杯やっているつもりなのに、上司からは、自分にとって無関心な「事業実績、利益増大」のことで叱られるから、その場しのぎの自己弁護的、防衛的な姿勢が、知らぬうちに私の身について、先輩諸師の慈訓を、私自身、はたして素直に受けいれているであろうか、と反省させられたからであります。

こんな私が、おこがましくも教化主事と人権擁護推進員とを拝命してしまいましたが、当面する宗門教化の一大事は、教化者の人権学習であると思います。早急に「人権を侵害し、差別をひきおこす、誤った仏教語の理解、誤った教義の解釈、『何を』『どのように』誤って教化し、また、聞く人をして、誤解せしむる教化をしてきたのか」を明確にする必要性を痛感いたします。皆様と共に、教化者としての研鑽を積み、自己改革をしてゆかなくてはならぬ。と思っています。

思いつくままの駄文お許し下さい。

今後共、御教導、御鞭撻賜ります様　お願い申しあげます。

今模索していること



島根県
教化主事
門脇利法

島一宗務所管内の布教々化について申しますと、特に、若い方々にしっかりした布教の力を身につけていただきたい、その研修方針としては方法論偏重でなく、教義、理念を深め把握して実践して欲しいと考えている所で

あります。

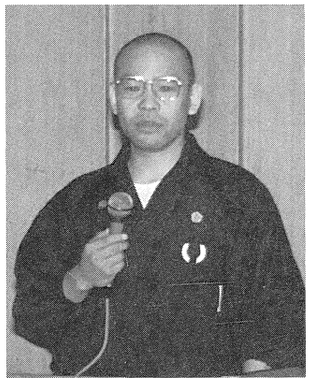
その一環として、今年度の島根県布教講習会（島一島二教化センター共催）は、人権に関する意見提言を発表し、講師の指導助言並に研修者が自由に意見を交わすという型をとり活発な意見適切な指導があり、成果があったとの評価を頂きました。

この研修会においての私の発表は梅花講、梅花級階取得に対して、今尚、洞門宗侶の行うものでないとの如き排除気風があること、又布教師検定制度に於いても同様の世界が存在すること、このような排除差別体質は早急に改め、大先輩、老宿諸老師も今の組織制度の中で生きようとしている私共も、相共に認めて頂く幅広い心をお願いしたいと述べ、これに対し、組織、資格に入れないとの逆差別の実態もあるとの意見があり、共通の苦しみ痛みと反省したことでした。

恥しい事ですが、二月に転倒して左膝を痛め、正座が出来ず困っています。困って気付いたことがあります。法事等で私は、二、三分正座をして、身心の落ち着きを得てから礼拝読経と進めることにしていますが、これまで、こうした時の私の指導なり説明は、身体の不自由な人々がおられるであろうとの認識配慮が大変不充分であったと強く反省が起りました。そこで今後の導入説明を模索している所であります。

同時に、以前から思っていた事が再燃いたしました。それは、宗門に於ける根幹であります「只管打坐、即心是仏を承当することを宗旨とする」との宗憲第三条に疑念を持ったりする気は毛頭なく信順しているのでありますが、健康体の人々に私共と同じように、打坐を行じる指導は当然きちっと行う事ですが、この実践を身体の不自由な人々に指導敷衍する方法、又その方法を認める土壌が充分出来ていないと思われるのですが如何でしょうか。座れない人、車椅子の人、寝た切りの人、腰が曲って横になって寝ている人等様々な対応を模索し、正門の参禅に励むと共に亜流であっても認める幅広い心を持ち合わせることが今を教化する私共の責務と感じています。御老師方の御指導を賜りたい次第です。

「花まつり」あれこれ



島根県第二
教化主事
伊藤皓元

昨年の五月、地区の仏教会でデパートのイベント広場を借りて「花まつり」を行いました。お寺で行う「花まつり」と異なり、種々な出来事に接しました。まさに、【買物客の花まつり】でした。

◎「甘茶をかけて下さい。」と灌仏とすすめると、自分に甘茶をかけてしまったご婦人。

◎ 花御堂を取り囲み、誕生仏に向かって「かわいい!!」という女子高校生。

◎ 赤ちゃんを抱いた若いお母さん。「この子のおでき直るかしら?。」

◎ ピアスをして髪を赤く染め、だぶだぶのズボンをはいた若い男の子に灌仏をすすめると、甘茶をかけて手をあわせました。それを見ていた連れの同じ服装の女の子が、声をあげて驚いていました。

などなど、私にとって思いがけない体験となりました。

ところで、昨年の「親子ゼンインサマーセミナー」で、話をすることになりました。子ども達に、『花まつりで、甘茶をかけたことがあるか』と質問しました。百二十人ほどの子どの達の中で手を挙げたのは十四・五人だけでした。比較的お寺と接する機会の多い子ども達の集団だと思っていただけに、その人数の少なさに驚きました。

「花まつり」は一般民衆に深く根づいた仏教行事でした。しかし、このままでは、その行事も行事があったことも忘れられてしまうのではないかと思いました。「花まつり」のあり方をいろいろ工夫して、出来るだけ多くの人が、参加できる機会を作っていきたいと考えています。

ほとけさまに出会う

ひろ・さちや

「かわいそうに……」

と、心のなかでつぶやいて、次の瞬間、(あっ、しまった!!) と反省することがあります。じつは、他人を「かわいそうに……」と見ることは、とんでもない傲慢な態度なんです。そんなこと、よくわかっているつもりなのに、そして人々には注意しているのに、自分で失敗するのだから、けしからんですね。

わたしたちは、たとえばインドに旅行して貧しい人々を見たとき、あるいは身体にハンディキャップをもった人たちと出会ったとき、「かわいそうに……」と同情します。けれども、それは本当は同情ではないのです。よく考えてみるとわかりますが、他人を「かわいそう」と見るのは、結局は自分の優越感が裏返しになっているのです。俺は豊かである、わたしは五体満足だと、自分をひけらかしていることになりますね。自分では意識していないでしょうが、論理的にはそうなります。だから、「かわいそうに……」ということばは、絶対に言ってはならないことばなのです。

それに、言われたほうの身になって考えてみてください。全盲の人が晴眼者に、

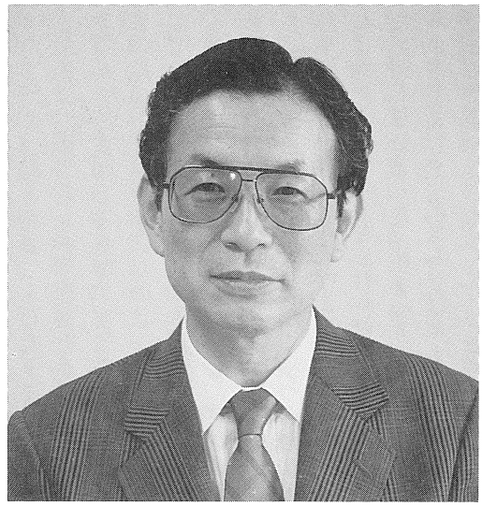
「あなたは目が見えないのね。かわいそうにね」

と言われて、喜ぶと思いますか!! 貧しいインド人が豊かな日本人に、「あなたがたは貧しいのね、気の毒にね」と言われて、感謝すると思いますか!! とんでもない!! インド人は日本人を憎んでいます。「日本人は貧しい人たちを見て、〝かわいそう〟と言う。傲慢な日本人だ!! わたしは日本人が嫌いだ」そう言っているインド人が多数います。わたしはそのようなことばを、何度もインド人から耳にしました。

「かわいそうに……」ということばは、わたしたちは禁句です。言ってはならないことばです。そのことを、しっかりと胸にたたんでおかねばなりません。

＊

では、わたしたち仏教者は、身体にハンディキャップをもった人たちや貧しい人々に、



ひろ・さちや（本名　増原良彦）

1936年大阪に生まれる。
1960年東京大学文学部印度哲学科卒業、元気象大学教授、現在宗教評論家、著書「般若心経の読み方」「釈尊物語」「仏教の常識」「仏教に学ぶ八十八の智慧」「禅」「入門歎異抄の読み方」「死後の世界の観光案内」等多数
●中国管区教化センター「禅を聞く会」の専任講師●親子ゼンインサマーセミナーメイン講師
●NHK衛星第２放送において「般若心経の心」を解説されています。

どのような態度をとればいいのでしょうか……？

簡単です。わたしたちはそれらの人を、

――おがむ――

のです。いや、ハンディキャップの人たちや貧乏な人々だけではありません。わたしたちはどんな人と出会っても、その相手を「おがむ」ようにすべきです。それが仏教者のとるべき態度だと思います。

なぜなら、すべての人が自分の身体を、

――ほとけさまからお預りしている――

からです。わたしはわたしのこの身体を、ほとけさまからお預りしています。あなたはあなたのその身体を、ほとけさまからお預りしているのです。同様に盲目の人は、その目の見えない身体をほとけさまからお預りしているのです。

わたしたちは、自分がお預りしている身体や運命のことで、ほとけさまに文句を言ってはなりません。わたしのこの身体よりも、あの人のあの身体のほうがいい……なんて考えるのは、ほとけさまに対する裏切りだと思います。わたしたちは、「自分」というものを大切にしないといけません。「自分」を大切にするということは、ほかならぬこの「自分」がほとけさまからのお預りものだと気づくことです。道元禅師が、

「仏道をならふといふは、自己をならふ也」

（『正法眼蔵』現成公案）

と言っておられるのは、きっとそういう意味だと思います。

だとすれば、盲目の人は、そういう「自己」をほとけさまからお預りしておられるのです。ほとけさまはその人に、

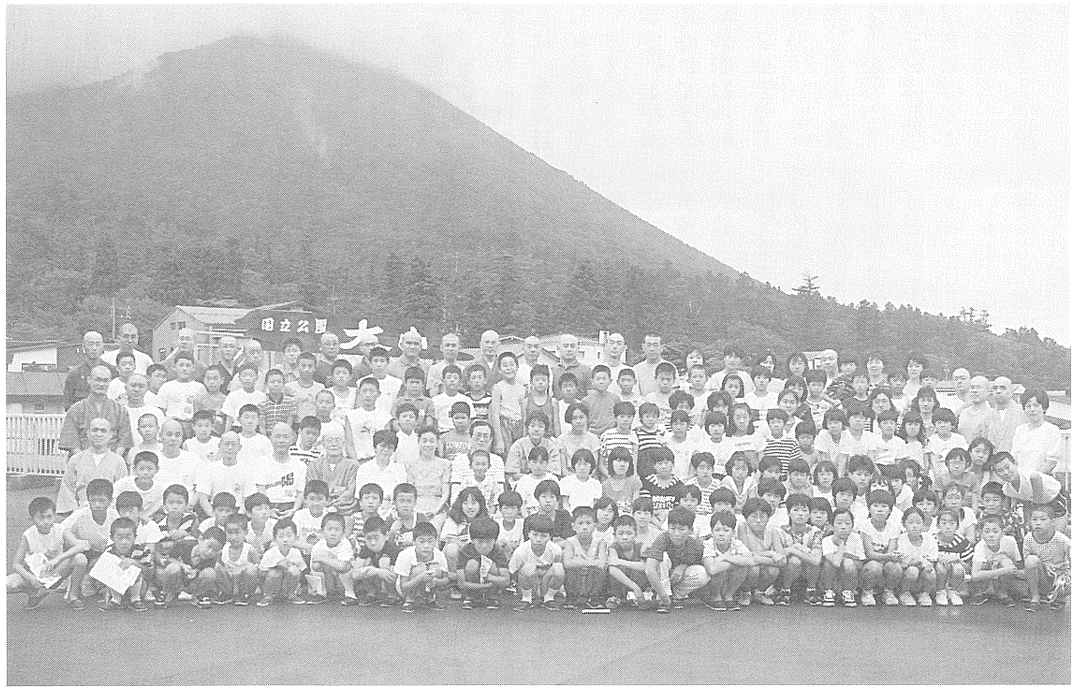
「あなたは盲目だけど、きっと幸福になれるからね。盲目の自分を大事にして、そして幸福になってよね。あなたが幸福になれるように、わたしは応援してあげるからね」

と言っておられるのです。もちろん、読者のあなたにも、そしてわたしにも、ほとけさまは、「幸福になれるように応援してあげるからね」と言ってくださっています。

だから、わたしたちは全員、ほとけさまから大事な「自己」をお預りしているのです。どの人もどの人も、みんなすばらしい「自己」をお預りしています。そういう他人を見て、わたしたちが「かわいそうに……」と言えば、きっとほとけさまは叱られるにちがいありません。わたしの預けた「自己」を、どうして軽蔑するのか!! そう怒られるでしょう。

わたしたちは、他人をおがみましょう。みんなほとけさまからすばらしい「自己」をお預りしています。したがって、すべての人がほとけさまなのです。わたしたちが出会う人をおがむとき、それがほとけさまに出会っていることになるのです。わたしはそのように考えています。

第7回親子ゼンインサマーセミナー INだいせん



親子禅セミナーに参加して

岩成敬子

一昨年の萩でのセミナーに魅かれて、一日遅れて参加させて頂きました。お昼前にようやく大山に到着しますと、皆さんがウォークラリーから帰ってこられたところでした。懐かしいお顔に次々とお会いすることができ、「やっぱり出かけて来てよかった。」と嬉しく思いました。このセミナーは、人を暖かく輪の中に入れてくれる魅力があります。

前日から参加している娘の突然の発熱では、皆様に大変ご迷惑をおかけすることになり申し訳ありませんでした。部屋で、氷枕をしている娘とキャンプファイヤーの楽しく賑やかな声を聞いておりました。途中でダウンして残念でしたが、来年もまた参加すると話しております。遅れて来たうえにハプニングがあり、活動に少ししか参加できなかったのですが、一つ気にかかることがありました。それは、「親しき仲にも礼儀あり」ということわざがありますが、子ども達が指導の先生方に接する態度に目にあまるものがあることです。現代っ子の風潮と云えば、その通りなのですが…。少なくとも、このセミナーに参加する子ども達なのですから気をつけてほしいなと思いました。

最後になりましたが、セミナーの企画、運営に当たられた諸先生方に感謝し、次回もまた良い出会いができますように念じております。

ありがとうございました。

中国管区親子ゼンインサマーに出席して

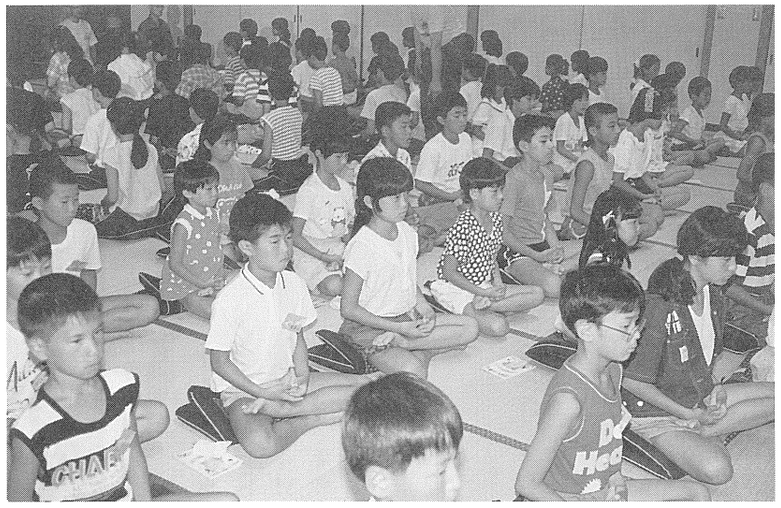
敦岡祖雄

今年で開催七回を迎えたこの会も年々参加者が増え、今回参加人数は百二十九名を数え管区の青少年教化に対する意気込みを強く感じるとともに、日程も例年の反省を踏まえ、十分に練られたものとなっており参加者の特に小学校低学年の生徒にも無理なく消化できるものであった。

特に、中国管区親子ゼンインサマー専任講師である、ひろさちや先生のお話は時間を三十分とし五回に分けておこなわれるなど、また渡辺法子先生のゲーム、林一成先生のマジック・人形劇などなどまさに子供を考えた日程であった。

十二班に分けられた参加者には、各班それぞれに管区の青少年教化指導者が二名ずつ担当し、常に注意の目を向け、指導にあたっていた。

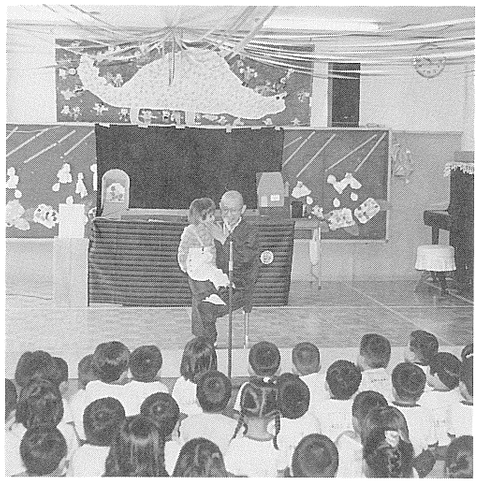
この研修会ノウハウを各管区の教化センターに伝達し、今後の青少年教化指導に生かしていきたいものである。



集中伝道

隠岐島集中伝道

地蔵院　林　一成



隠岐島は、当センターのご縁で三度行かせて頂きました。もともとセンターの設立当時より伝道車の運転手として又、映画のフィルムまきもどしの合間の腹話術、そして荷もつのもち運びをさせて頂いてもう二十年のお付き合いかと思います。

最近は、センターの中に車に通の人が多いのか、それとも岡山の田んぼに伝道車を脱輪させた前科があるのか伝道車のハンドルを握る機会は全くなくなりました。個性音豊かなあの第一号車サバンナで当時センターの光福寺様、吉祥寺様とこの島に訪ずれた懐しい日々が蘇ってきます。

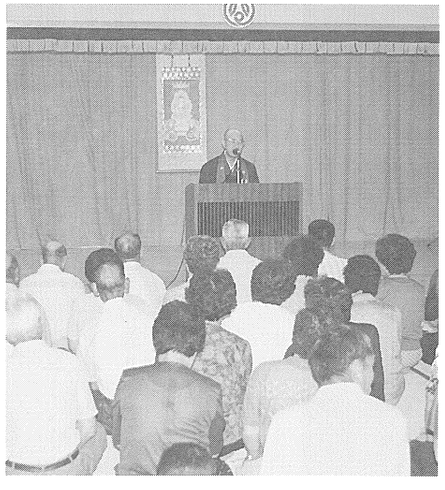
今回は隠岐島共生学園第一、第二保育所で人形劇〝3びきのこぶた〟などの公演を、また西田会館と港町集会所で阿弥陀寺様のお説教のつなぎに腹話術を演じさせて頂きました。隠岐島の子ども達の印象を申しますと、純真、活発、元気、明るい子ども達、そのものです。幼児の世界をみる限り精神的に毒されていないように思え心の安堵感を覚えます。無垢な子ども達の未来に、現代の過酷な生存競争が、待っているとは思いたくないのが人情です。

獣類は、本能や欲情はあるがほったらかしにしておいても無茶にならないのは、地球の歴史が証明済みです。人間が物質的豊かさの追求に、ブレーキを自らの理性でコントロールできるに至るまでは至難のわざでしょう、宗教者は、宗教的立場から豊かさも、競争も悪と宣言すべきと思います。

センターの皆様と親子セミナーまた、この度の集中伝道で多くのことを学ばさせて頂き本当にありがとうございました。当地のご住職医光院様、完全寺様には心暖る歓待を受けお話を賜わる中で法燈継承のご心労又、布教のご決意を肌で感じました。隠岐島名産モズクを手に相棒の人形〝せとぎわのトット〟と離島する朝、港で医光院様のお姿を再び拝見しました。

隠岐の集中伝道を了えて

阿弥陀寺　宮田玄洞



隠岐は島根半島の沖合四十～八十キロに浮かぶ三つの島からなり、後鳥羽上皇、後醍醐天皇など、哀話を秘めた流人の島として有名である。

尾道駅から伝道車に搭乗、中国山脈を縦断して境港から乗船、日本海を北に向う船旅は、神話と伝説にあふれる、隠岐への期待感で一ぱいだった。

やがて水平線上に島影が浮かび、未知へのここちよい予感を抱きながら、目的地西郷町に到着した。

港まで教場を設営して下さるご住職がお出迎え下さり、島内の実情をお聞きした。

隠岐には宗務庁直轄の寺院が六ヶ寺あるが、その法灯は二人のご住職で護持されている。

「年に一度特派布教の巡回で法益に浴してはいるものの、このような僻地では法縁もとかくうすれがちで、伝道車の集中伝道は地域の実態からして本当にありがたい。」とのこと。

初日の教場は西町文化会館で百名近い聴衆が参集、本尊上供、映写、続いて一時間餘りの法話であったが、終始熱心な聞法態度に心うたれた。翌二日目の日程は午前中幼稚園を訪問、林師のゲーム、腹話術の熱演は時間を忘れさせ、園児達は大満足であった。

夜の港町集会所での行持も、前日に増して百五十名からの聴衆で、心から歓迎して下さった気持が教場に満ち、共に法悦に浸らせてもらえた。

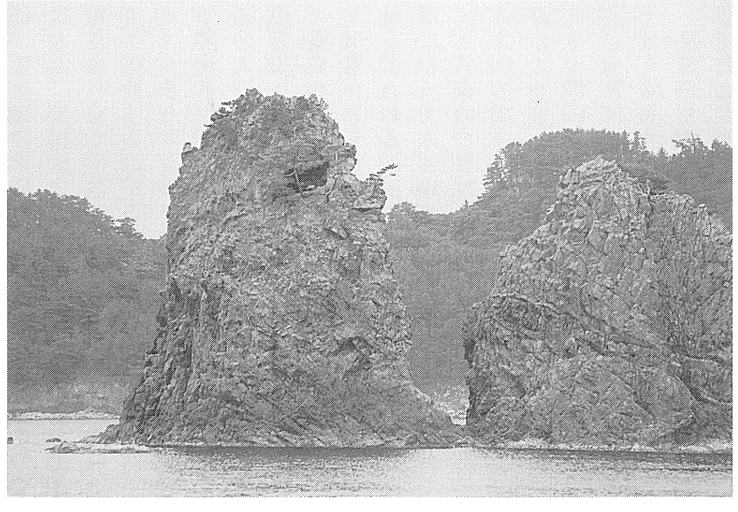
隠岐の地を踏んで、最初目についたのが、「太平記の島隠岐によようこそ。」それに「差別のない住みよい町に。」「やさしい心と思いやりの心を育てましょう。」という標柱であった。

現代の社会が何を求めているか、今地域の人がどんな目的に向って努力しているか、それを知ることに教化者はつとめなければと思う。大衆あっての教化だから、釈尊も一所不住、応病与薬、随機開道と、対機を大切にとお示しであります。

やさしい心、思いやりの心を育てよう。ということばに触れた時、真理は時と所を越えて不変、それを見失わないようにするには今一つ、忙しい明け暮れの中にも「ゆとりある心をとりもどそう」ということではなかろうか、つい忙しい時に急いで飛び出しては、戸締りはしたであろうか、電気器具の始末はどうであったか、忘れ物はなかったか、思い出しては後帰りをして、愚かさに舌打ちすることがあまりにも多い現実です。

ゆとりある心をもたなければ、やさしい心も思いやりの心も育たない、人権を大切にする意識も育ちようがない、と思いを廻らす時、宗門人として果さなければならぬ、大きな役割りと責任を感じます。

自然が創った美しい景観の中で、心安まる温かさを与えて下さった、隠岐の皆さんに心から感謝申し上げます。



誌上法話

「春に想ふ」

中国管区布教師　島田弘文

「佛縁を結びて春を待ちにけり」　杉洞

吾が俳句の師・伊万里圓通寺道場師化森永杉洞老師のお句である。老師は臨済宗南禅寺派の方であり、ホトトギス派の重鎮でもありよく大会などの選者として来ていただきそのご縁で拙寺境内に老師の句碑もある。或る年句会のあとでこんな話しをなさった。

「私がみなさんに自慢出来ることが三つあります。一つはお坊さんになってから五十年になることです。二つは俳句をやり出してから同じく五十年になります。三つ目は碁を止めてから三十年になります。碁が好きで打ち出すと無我夢中になって三日三晩も打ちつづけるほどでした。若い雲水さんが兵隊に征きますその挨拶に来てもロク〳〵言葉も交さず送ったことも何度かありました。或るときその雲水さんが無言の凱旋をしたのです。それ以後碁を打つことを止めました。このことは美談として聞いていただけるかも知れませんが、僧侶が僧侶として五十年、俳句の先生が俳句をして五十年、それは当り前のことで何が自慢かと思われるかも知れません。然し、同じ大学を出、同じ僧堂で修行した仲間が今数えて見ると本当に五名も居ないのです。みんな先生になったり、銀行につとめたり、変ったところでは俳優になったのもいます。俳句の方もこれと同じでいつの間にか俳誌から名前が消えてゆくのです。私がみなさんに胸を張って自慢出来るのはこの三つだけです。

どうかみなさんも精進して下さい。」

御開山さまは私達に「只管打坐」とお示し下さった。当り前のことを当り前に行じてゆく、このことではないのだろうか。わたしたちはもう、ごく当り前のことには感動せず、何か変わったもの、きわだったものでないと駄目と思い込んでいるようである。

今、新しい福祉思想の台頭が云われている。それは、人間の尊厳や人権思想の向上とともに、要援護者を施設に「隔離」保護するのではなく、要援護者が生れ、育ち、生活してきた地域社会や家族の一員として生活が送れるよう援助するのが当然だとする考え方で、ノーマライゼーションと呼ばれています。老人や障害者もできるだけ地域の中で一緒に、普通の人びとと同じように生活することは当り前と云う考え方が承認され、普及され、定着するにつれて従来の施設中心の考え方に大きな反省が迫られています。地域福祉、在宅福祉と云われるのがそれです。高令者社会は確実にやって来るのです。

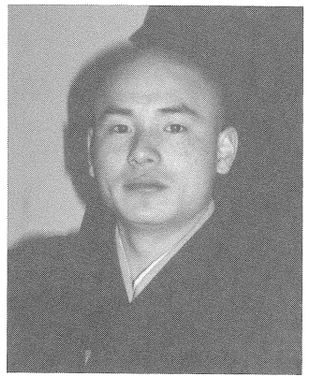
「共存の世界」（ともに生きる社会）それは宗門の掲げる理想でもあり、御開山さまのおこころでもありましょう。

草の庵に寝ても醒めても申すこと
南無釋迦牟尼仏　あわれみたまえ
南無大恩教主　南無釋迦如来

一日たりとも、片時たりとも心をこめて世界平和のために祈りたいものです。

「人権学習について」

島一宗務所人権擁護推進主事　佐藤直宗



人権学習のあり方が問われて久しい、これまでの宗務所の人権学習を振り返ってみるといずれも単発的に行われているのが現状ではないかと思われる。

数年前から、計画性のある人権学習が望まれてはいるが、その指針となるものが無いため、今一つ決め手に欠けている。

私自身、様々な人権学習にであい、自らの不明を感じ、恥じることばかりであるが、それを土台とし如何に問題解決の糸口としていくのか、最終的には自己の人格と言うことになるのであろうが、まだまだ暗中模索といえる。

企画する側に切実さがないのか、受ける側に問題意識が希薄なのか、上意下達的にすべての事柄がゆきわたり、右向きならば右と言うのではファシズム的な思いがする。

しかしながら、少なくとも他人に苦痛を強いる生き方は避けられて然るべきではないか、何気ない一言が致命傷となることを私共は考えていく立場にいるのではないかと思われる。

「一切衆生」云々と言いながらも、一切でないものを認めてしまう、それならば「思いやりの心」と同じく、言葉だけが空回りしているように思えてならない。

現実は刻一刻と留まることを許してはくれないのに、考える方は意外に悠長に構えているのではないか、いやおそらく布教・教化の第一線にある寺院住職は日々苦心しておられるのではないかと思われる。

現実の事象ばかりが先行して、真実を知ろうとする努力を怠っているわけではないが、総論賛成でと言いながらも、各論の部分になると実際的に、どのような営みが必要なのか真剣に論議されるべきではないかと思われる。

署名運動にしても、言われたからというのではあまりに主体性に欠けている。具体的な営みであるはずなのに、理解はさまざまであり啓蒙・啓発の足りなさを痛感している。

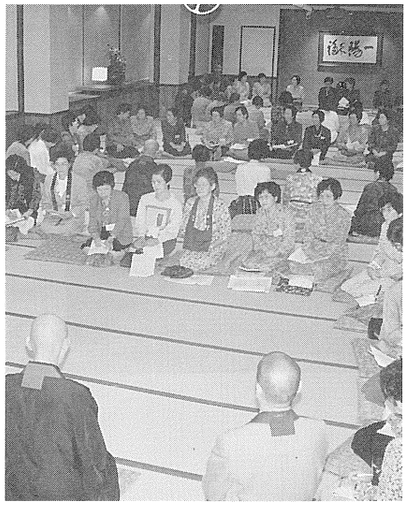
宗教にたずさわる者が、どのように人権問題に関わってゆくのか、これまでも宗門のなかで少しずつ整理されていると思われるが、それが人権学習の場でもう少し詳しく説明されても良いのではないかと思う。山ほど資料を積んでも読まない限りは紙屑同然であろう。

勿論、これまで述べてきたことは、自己反省を含めてであるが、単発的であると言いながらも、あらゆる場で人権学習が設定されるのであるから、疑問を疑問として表明していくならば、もっと前向きな議論ができるのではないかと思われる。

何れにしても、差別の現実がある限りは、私共も恒常的に人権の問題と取り組まなければならない。それは自らの依って立つところを明らかにして行く、営みではないかと思われる。

婦人会

正安寺婦人会
秋柴絹江



正安寺婦人会が誕生しまして、今年満六才を迎える事が出来ました。始めはヨチ〳〵歩きでしたけれども、宝雄東堂御夫婦の一から十までの御指導によりまして、今では大地を踏みしめて、しっかり歩ける様になって居ります。出来得る限り、月例研修会を開いて頂き、坐禅、佛壇のまつり方、そして修証義、舎利礼文の解釈等々、色々教って居ります。忙しい毎日の生活の中でお話を聞く二時間は、本当に静かな落着いた気持ちを味わして頂き、心豊かな憩いの場でもございます。

中国管区研修会に、私達一般の者も参加さして頂き、講演を聞いての勉強、大勢の方々とのふれ合い、そして昨年十月には、体験発表までさして頂きました事、全て婦人会のお蔭だと感謝致して居ります。私は実家も婚家も曹洞宗でございます。寺族の方々の様な修業は出来ませんが、実父が大変信仰家で毎朝毎晩お経をお唱えして居りましたので、子供の頃に般若心経は覚えたものでした。現在は亡くなった主人、そして御先祖様に朝夕欠がさずおいのり致しますので、孫が大分覚えている様でございます。有難いお釈迦様の思いやりの心を忘れずに、お加護を受け乍ら健康で明るく、毎日を楽しく過さして頂けます様、念願致して居ります。

青少年教化指導者研修会に参加して

山口県定光寺住職　西村宏司

平成三年六月二十日、二十一日、梅雨空の中、青少年教化指導者研修会が、開かれた。何度かこの研修会に参加させてもらっているのだが、学ぶ事、感心させられる事ばかりで反面、自分の勉強不足、努力の少なさに反省させられる。今回の研修会でも例年以上に、勉強させてもらった。特に実演された人形劇では、セット、ストーリー等、すばらしく、青少年対象とはいうものの大人が見ても充分楽しめ、感動させられた。又、ゲームにしても毎回〳〵新鮮であきない。私も自坊などで禅のつどいや子供会等ゲーム指導をするが、子供ほど常に新鮮な感覚をもっているものはいないのではないかと思う。目に見えるもの耳に聞こえるものが、秒毎に変化し、あふれんばかりの現代社会にあって、教える者の立場として、常に頭を悩まされるところでもある。研修の中で、前述の〝現代社会〟の教育について講義があったが、学問優先の教育社会、感情の薄い子供が多くなっている現実、その中での、親や教育者の有り方が指摘されていたが、全く他人ごとではない。お寺のあり方を考えた時、そういった人達に胸をはって、指導できるだろうか。研修会を終えてもう一度お寺の住職として何が出来るかを考えさせられ、四摂法の実践、教育ではなく共育の実践につとめていくことを学んだ。

「禅をきく会」

山口大会

曹洞宗山口県宗務所副所長
南正道

平成三年六月五日、曹洞宗山口県宗務所・中国管区教化センター共催による第五回「禅をきく会」が新南陽市ふれあいセンターにおいて開催された。当日は幸い初夏のさわやかな天候に恵まれ、県下十五教区より千三十名の出席者が新装なったふれあいセンターに参集した。

青木教化主事の進行により午前十一時開会が宣言され、本尊上供が藤井宗務所長導師でおごそかに行われ、引続き長岡管区統監老師のご指導のもとに椅子坐禅がはじまった。

中央壇上には教区長、曹洞宗青年会、参禅会、梅花講の代表者がそれぞれ坐禅を示範し参加者全員が椅子坐禅の姿勢と呼吸法を教わりながら、坐禅に入った。静寂の十分間、はじめて坐る人も多かったがその姿は真剣そのもので会場の空気は千人以上の人が居るとは思えぬ厳粛さに包まれ、まさに圧巻であった。

昼食後、琴演奏によるアトラクションに引き続いて山口人権擁護委員解説による十六ミリ映画「ふれあい」(五十分)が上映され、正しい人権問題取り組みについて指導があった。

午后二時より中国管区教化センター専任講師ひろさちや先生から「生活の中の仏教」の演題のもとに平素からどのように仏心をもって生活すべきかをユーモアを交えながら示唆に富んだ感銘深い講演を二時間にわたり拝聴した。

閉会式には再度、禅の心にたちかえって全員黙想の座につき、予定どおり午后四時閉会の幕はおり無事円成した。

会場から帰途につく会員の皆さんの顔には心のやすらぎさえ感じられ宗門教化の基本である禅の大衆化への第一歩のつどいの会ができたことを嬉しく思った。山口県としては初めての「禅をきく会」であったが盛況のなかに、そのねらいがほぼ達成できた陰には、県下各教区長、老師をはじめ護持会、寺族会、婦人会、梅花講の積極的なご支援と会場の演出、諸準備など前日から泊まりこみで会をあげてご協力をいただいた山口県曹洞宗青年会の連帯感に満ちた意欲的取組みが会の成功の大きな支えとなっていたことを深く感謝し心からお礼を申しあげたい。

教化センター 平成四年度事業計画

一、全国センター職員中央協議会　（四月一～三日）
二、教化センター報第八号発刊　（四月）
三、中国管区曹洞宗婦人会研修会役員会　（四月二十日）
四、管区布教師連絡協議会　（五月十三日）
五、企画・総合企画委員会　（五月）
六、第六回管区禅をきく会　（六月八日）
七、中国管区青少年教化指導者研修会　（六月九～十日）
八、中国管区集会　（六月十八～十九日）
九、第八回親子ゼンインサマーセミナー　（七月二十七～二十九日）
十、中国管区布教師協議会・講習会　（九月八～九日）
十一、梅花流講習会〔中国・四国・九州〕　（九月二十八～十月一日）
十二、中国管区曹洞宗婦人会研修会　（十月二～三日）
十三、センター運営・企画委員会　（十月二十一日）
十四、広島県第七教区ブロック研修会　（十月三十日）
十五、第三回禅をきく会〔本庁主催〕　（十一月十九日）
十六、全国教化センター職員連絡会　（十一月中旬）
十七、中国管区人権学習会　（十二月二～三日）
十八、教化センター報第九号編集会議　（一月下旬）
十九、島根県布教講習会　（三月四～五日）

センター役職員

統監	長岡徹宗	善昌寺 内	〒729-34 甲奴郡上下町上下341	☎084762 －3054
主監	用元一雄	長光寺	〒722-24 豊田郡瀬戸田町垂水830	☎08452 7－2467
賛事	村上邦雄	摩訶衍寺 内	〒722-01 尾道市原田町梶山田4338 ☎0848 38－0656	☎(連)0849 53－9153
賛事	飯島孝文	長福寺 内	〒722-22 因島市中庄町3273	☎08452 4－0391

お知らせ

☆四月よりＮＨＫ広島文化センターが開講されました。その中に、禅の講座が設けられ「生活の中の禅」と題し、長岡統監と田中哲彦師のお二人が講師として頑張っておられます。

長期に渡って開講されますので、毎週金曜日、午後六時半より二時間開かれていますので、檀信徒各位へご紹介下さい。

☆今年より布教師特設検定が、全国で四会場の開催となります。

中国管区は、四国管区・九州管区の三管区で一会場となり、今回は、中国管区の担当で、秋頃、広島で開催する予定です。